

もしこの世に自分一人しか いなくなったら(ぼっち2)

ある日、突然、ドアを開けて・・・外側へ出た瞬間に、自分一人しかいなかったらどうなるであろう～真にひとりぼっちになってしまったのだと認識した。の続編である。

もう今日が何年何月何日何曜日の意味が見いだせなくて、あの日から何日経過したのかカウントしなくなって、もはやそれを知る由もないし、気にならなくなっていた。

ある日、サクスを吹いてみた。思いっきり自由に。フリージャズと現代音楽の狭間のような魂の叫びを思うがままに、最高の気分だ。まだ意識の中にある「うるさい」なんて苦情は全くないので、広々とした公園で思いっきり吹いた。が、音が抜けてあまり体や自分の耳に響かない。そこで、広いコンサートホールを見つけて、中に侵入したが、相変わらずの停電でローソクを灯りに、誰もいない中、今の想いを魂の限り命懸けで吹いた。反響はあったが、自分の出した音が物理的に遅延して、その構造物が持つ独特の反発係数の複合による自分が感じた「こだま」ですらしかない。自分の出した音に対しての評価の結果としての、聴衆の反響では全くない。共感の微塵もない。演奏ではない。演奏は、その聴衆にめがけて、その音を奏であるが、誰もいないのである。独善の極みであろうが、その評価すらないし、出来ない。その状態を狂気と判断されようが、もう既にその診断を下す者すらいない。自分自身の意識しかないが、それすらもう自己を離脱した彼方から俯瞰すると、無意味な状態表現の一つに過ぎない。関係性や因果性が皆無なのである。和音を意識したが共演者がいない。不可能だ。ソロでさんざん吹きまくり疲れ果てた後、たまらない虚無感に襲われ、嗚咽した。涙はもうだいぶ以前に涸れ果ててしまったので出ない。吐き気すら催す嗚咽である。もう居たたまれなく、サクスを投げ捨て外に飛び出した。

まだ、暮れではなかったが、日は傾いていた。気が付いたら空に鳥がいない。虫もいない。大好きな猫や犬さえも消え、今更ではあるが、どうも動物類が全滅(消滅)してしまったようだ。日々の懸命な「生きる活動」の影に隠れて見えていなかったのだ。今になって認識した。どうしようも出来ない寂寥感に襲われて、また呼吸が大きく乱れた。

もう日が暮れそうである。かなり冷え込んできたので、火をおこすことにした。火はかろうじておこせた。漸く暖かくなり、心理状態は予断を許す状態でないものも、やや落ち着いてきた。薪になるものも十分すぎる程かき集めてきた。どんどん焚いてみた。

とっぷりと日が暮れた。火のお蔭で寒くはない。当面の食糧や水等の生活物資は確保されている。暫くは生きる目処は立っている。帰るべき家はあるが、帰る必要はない。火を見ていると、とても癒される。炎の揺らぎがたまらなく心地よい。とても癒されるどころではない。心のよりどころである。明日もやってみることにした。